

# どう読むか、聖書

——「イエスの十字架」理解をめぐる——<sup>1)</sup>

青野太潮

## はじめに

思いがけず神戸栄光教会にお招きをいただきまして、心からありがとうございます。さきほどは300名を越す会衆の前で説教をさせていただき、私にとってはまったく稀有な体験をさせていただき、心から感謝いたしておりますとともに、大変恐縮もいたしております。キリスト教の伝統にあまり忠実とは言えないような私の説教を、皆さんが静かに、そして、私はそう感じたのですが、とても穏やかに、暖かく受け止めてくださいます。大変嬉しく思うと同時に、率直に申し上げて驚いてもおります。日ごろの白井進先生を始めとする牧師先生方の、決して伝統に埋没してしまわない牧会の在り様を、容易に想像することができました。

そして礼拝後にはこうしてまた優に100名を越す方々が、やはり静かに穏やかに、私の講演のためにこのホールに集まってくださったことに、深い感動を覚えております。

皆さんの神戸栄光教会の1922年に建てられたゴシック様式でレンガ造の旧教会堂は、日本における近代教会建築を代表するものであり、三角屋根の聖

---

1) 本稿は2010年10月17日の日本キリスト教団神戸栄光教会における講演に加筆・訂正を施したものである。指定された講演題は明らかに拙著『どう読むか、聖書』（朝日選書）、朝日新聞社、1994年、を意識したものである。因みに、その続編を同じ朝日選書から出版するようにとの執筆依頼を受けて、筆者は現在作業中である。

堂と約40メートルの高さの鐘楼は、隣接する兵庫県公館（旧兵庫県庁舎）とともに神戸の街のシンボルとして親しまれてきた名建造物であったと伺っております。しかし皆さんはそのすばらしい教会堂を、1995年1月の阪神・淡路大震災による倒壊によって失ってしまわれました。現在のこのすばらしい礼拝堂は、皆さんが2004年に再建築されたものだそうですが、ぜひとも旧会堂と同じ形態を、などとはお考えにならなかったにもかかわらず、結果的には旧会堂の外観を踏襲する教会堂の設計が採用され、外壁のレンガは手積みで以前の趣に近づけるように施工された、と伺いました。多くの労苦がおりだったことでしょう。ほんとうにすばらしいことだと感銘を受けております。

それにいたしましても、あの大地震のような「不条理」を、私たちはいったいどのように受け止めたらよいのでありましょうか。それは結局は「神は公正で義なるお方なのか」という問いを問う「神義論」の問題なのですが、そうしたことがらにも注目しながら、今日のテーマについてしばらくの間にも考えてまいりたいと思います。

キリスト教の福音の中心は何なのかと問えば、クリスチャンであるなしに関わらず、ほとんどすべての人が、「イエスが十字架に架かって死んでくださることによって人間の罪を贖（あがな）ってくださいだったので、すべて罪人であるところの人間は、そのイエスをキリストと信じ告白して受け入れることによって救われる」というように理解しているのではないかと私は思っております。この場合「キリスト」とは、ギリシア語ではキリストス、ヘブライ語ではメシア（マーシーアッハ）であり、その意味するところは元来は「油注がれた者」ですが、そこから「救い主」という意味をもつに至っています。これは神学的な用語を用いて言えば、イエスの十字架の死を「贖罪論」（しょくざいろん）的に解釈するという理解です。しかしこれから私は、広く一般的に広まっているこのような解釈がキリスト教の福音のすべてではないということ、否、むしろもっと重要な解釈が別のところにあるのではないのか、ということについてお話をしたいと思っております。とくにその解

釈は、上で述べましたあの大地震のような天災との関わりにおいて人間が直面する「不条理」の問題について深く考えた際には、どうしても前景に押し出されてざるを得ない解釈である、と私は考えております。

## I. 福音書におけるイエスの十字架の死の描写

新約聖書に収められている文書としては大小さまざまの27の文書がありますが、それらの文書が描くイエスの十字架の死の描写は様ではまったくなく、ということをまず最初に確認しておきたいと思います。執筆の順序からすれば、使徒パウロが書いた手紙群である「パウロ書簡」（紀元50-55年頃に書かれています）が新約聖書の中では最も早く書かれた文書なのですが、しかしイエスの十字架を含む生前のイエスに関するさまざまな出来事が生じた歴史的順序からすれば、福音書の記述が基礎となります。そこで、まず福音書の記述について見ることにしまして、パウロのとらえ方についてはそのあとで見ることにしたいと思います。

福音書の中ではマルコ福音書（おそらく70年頃の成立）の記述が基本となります。なぜならば、マルコ福音書が福音書のなかでは最初に書かれたものであることを否定する研究者はごくごく少数しかいないからでありまして、マタイ福音書、ルカ福音書の二つは、そのマルコ福音書を下敷きにして、おそらく90年ごろに執筆された、と考えられています。したがってこれら三つの福音書はふつう「観点を共にしている」、それゆえに「共に観る」ことができる、という意味で「共観福音書」と呼ばれています。第四福音書のヨハネ福音書もおそらく90年以降に執筆されたのではないかとふつうは考えられていますが、しかしその内容は極めて独特であり、最初の三福音書とはまったく趣を異にするものとなっています。

### マルコ福音書の描写

ではマルコ福音書はイエスの十字架についてどのような描写をしているのでしょうか。マルコ15・33-39を見てみましょう。以下、断りがない場合には、

ほとんどの皆さんが今用いておられる新共同訳聖書からの引用です。

昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

私は高校3年生のときに、AFS (American Field Service) という高校生のアメリカ留学制度でアメリカのニューヨーク州 (ロッチェスター郊外) に留学しました。その頃は文部省がその選抜をしております、私が渡米しました1960-1961年にはちょうど100名が最終試験に合格しました。そして私は、その留学中に信仰を与えられ、洗礼を受けてキリスト教徒となりました。18歳のときのことです。そして、このマルコの描写についてであります、受洗後かなり長い間、つまり一年浪人した後にICU (国際基督教大学) に入学して新約聖書学を専攻するまでの二、三年の間、この百人隊長の「告白」は神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けたのを見たからこそなされたものだったのだ、と受け止めていました。しかしよくよく読んでみますと、そのようには決して書いてはありません。「百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、『本当に、この人は神の子だった』とやった」、とありますので、百人隊長はまさに「イエスの死に様を見て」そのように言ったのだ、ということが語られていることになります。実際、もしも現在のエルサレムにあります「聖墳墓教会」が建っている場所が、福音書が伝えているイエスが十字架につけられたゴルゴタの丘であったとしますと (それは15・22によれば「されこうべの場所」という意味を持っていたとされておりますが、讚美歌などでよく

「カルバリの丘」と表現されるのは、そのラテン語名 *calvaria* に由来します)、それは当時のエルサレムの街を囲んでいた高い城壁のすぐ外にあるほんの小高い丘だったということになりますし、400~500メートルは離れていたであろうと思われる距離からしても、正反対の側の城壁の方向にある神殿はそこからとても見えにくかったことでしょう。その上さらに「神殿の幕」とは「神殿の至聖所の幕」のことを意味していますから、仮に遠くに神殿が見えたとしても、その内奥までは外側からは見えませんので、神殿の幕の奇跡を見ての告白という解釈は成り立たないでしょう。

つまりマルコ福音書は、何の奇跡をも起こすことなく十字架の上で絶叫して死んでいったイエスの中に「神の子」を見るという「逆説」を語っていることになります。最近の大貫隆氏の『聖書の読み方』<sup>2)</sup>は適切に次のように記しています。「著者が言いたいことは、こうである。イエスが神の子であることは、初めから抽象的に完成しているのではない。十字架の苦難にきわまったその生涯全体の終わりから、『本当に神の子』になるのである。殺されてこそ神の子、これに勝る背理はない。この福音書は読者たちの常識的な『神の子』理解、すなわち、『神の子』に不可能はなく、まして殺されることなどありえない、という見方を引き裂こうとしている。『(神殿の幕が) 裂ける』<sup>3)</sup>がそのことを指している。」実際、この箇所ของすぐ前の段落でマルコ福音書は、人々は「今こそ奇跡をして見せろ」とイエスに言ったということをおのづかのように記していますが、それはまさに私たち一人ひとりが心のどこかで秘かに願っていることではないかと私は思います。しかし実はこの部分は、イエスはまったく何も奇跡を起こすことなどできなかつた、という事実をより際立たせるための引き立て役 (Folie) の役割しか果たしていない、と言つてよいでしょう。15・21-32を見てみましょう。

---

2) (岩波新書) 岩波書店、2010年、106頁。拙著『「十字架の神学」の展開』、新教出版社、2006年、243-245頁で言及したマルコ福音書研究者、E. Cuvillier および M. Ebner たちの見解も参照。

3) これは『もろもろの天が裂けて』(1・10)に対応している(105頁)。

そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。そして、イエスをゴルゴタという所——その意味は「されこうべの場所」——に連れて行った。没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、

その服を分け合った、

だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。

イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。(15:28には十字架が付されて底本には28節が欠落していることが示されている。異写本のいくつかは、「こうして、『その人は犯罪人の一人に数えられた』という聖書の言葉が実現した。」としている。)そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。」同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒に、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

何も出来ないイエスを「神の子」と告白する、しかもユダヤ教徒たちから見ればまったく神なき罪人であり信仰なぞまったくないとみなされていた異邦人の典型であるローマの軍人の百人隊長がそのような信仰告白をし、他方で自他共に信仰深いと認められていたユダヤ人たちにまったく信仰がない、という「逆説」がここには描かれています。

### マタイ福音書の描写

「逆説」についてはまたあとで戻ってきますが、いずれにしましても、そのような「逆説」に満ちたマルコ福音書の描写を読んでもなお、百人隊長は「神殿の幕が真っ二つに裂けた」奇跡を見てそのような告白をしたのだろう、と私が長い間考えていたのには、まったく理由がないわけではありません。それは第一福音書のマタイ福音書がまさにそのように言っているからです。マルコ福音書が最古の福音書なのだなどということをまったく知らなければ、誰も、新約聖書を読み始めるときに、第二福音書のマルコ福音書から始めるなどということはないでしょう。むしろ、当然最初に置かれているマタイ

福音書から読み始めることと思います。そしてそのマタイ福音書のイエスの十字架についての描写は、マルコ福音書を下敷きにしておりますからマルコと大いに類似してはおりますが、しかし決定的なところでは、以下のようにまったく異なった描き方をしているのです。マタイ27・45-54を見てみましょう。

さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

「地震やいろいろの出来事を見て」と書いてありますから、これははっきりと「奇跡信仰」です。しかもその奇跡たるや、イエスの「復活」の前に、墓のなかで死者たちが「復活」していた、しかし、日曜日の朝になるまでじっと墓のなかに留まっていた、などという驚愕すべき出来事だったということですから、現代人の私たちには容易に信じられるような内容ではありません。しかしそれでも、やはりまず最初に読んだこのようなマタイ福音書の描写が頭にインプットされて残っていますから、次のマルコ福音書がどんなにそれとは正反対の「逆説」的な描写をしていても、全然それに注意を払うことをしないで、マタイの視点からマルコを読んでしまうということを、私たちはしてしまうのです。しかしマタイとマルコとは、まったく同一の信仰を持っていた人であったわけではありません。むしろ、それぞれ独自の主張をもって自分の福音書を書いているのです。新約聖書の文書の記者たちすべてをまた、全部まったく同じ主張をしているかのように読んでしまっただけはいけな

いのです。とくにマタイはマルコ福音書を下敷きにして書いているにもかかわらず、なおもこのような描写をしているのだとするならば、そこにはかなり強烈な自己主張があったにちがいないはずです。

そしてさらに、私はチューリッヒ大学神学部における博士論文<sup>4)</sup>でパウロと「使徒教父文書」<sup>5)</sup>との関係を問うたのですが、そこではこのマタイ福音書の影響が圧倒的に強く、逆にマルコ福音書の影響はほとんど皆無に近いということがわかりました。ですから、キリスト教成立の極めて早い時期から、このマタイ福音書の影響力は群を抜いて大きかったのです。

### ルカ福音書の描写

そして、まったく同じように福音書記者独自の主張が見られることは、ルカ福音書にも当てはまります。ルカ福音書もマルコ福音書を下敷きにしておりながら、イエスの十字架の死についてのマルコの描写を、大幅に変更してしまいました。そしてルカ23・44-47で次のように記しています。

既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。

ここにはもはやイエスの「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という絶叫はなく、その代わりに、むしろ「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という、極めて信仰深いイエスの姿があります。そして百人隊長の告白も、この信仰深いイエスの姿やその前に起きた奇跡を見た上でなされたものとされており、その内容も「本当に、この人は神の子であった」ではなくて、「本当に、この人は正しい人だった」に変えられています。

---

4) Die Entwicklung des paulinischen Gerichtsgedankens bei den Apostolischen Vätern, Bern-Frankfurt a.M., Peter Lang Verlag, 1979.

5) 荒井献編『使徒教父文書』(講談社文芸文庫)、講談社、1998年、参照。

ルカ福音書はさらに、十字架上のイエスの言葉としては最も有名なものではないかと思われ、この場面の前の箇所23・32-34で、とくに34節で記しています。

ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。[そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのかわからないのです。』」人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。

ここでは、イエスが二人の犯罪人とともに十字架につけられた際に語ったとされる言葉は、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのかわからないのです」となっていて、自分を迫害する者たちを愛し、そしてゆるす慈悲深いイエスの姿が描かれています。そしてこのイエスの言葉は、愛とゆるしを標榜するキリスト教を代表する言葉として広く受け止められているものだ、と言っても過言ではないでしょう。

しかしここに問題がないわけではありません。それは、このルカ23・34には〔 〕の形をした括弧が付されている、ということです。このような括弧は口語訳では付されていませんでしたが、この括弧は何を意味するかと言いますと、新共同訳の新約聖書の部分は底本としてギリシア語の原典の校訂本である UBS (United Bible Societies) 版の Greek New Testament 第3版を用いているのですが、そこではこの部分に【 】が付けられていて、この部分が元来ルカ福音書に確実に記されていたとするには疑問がある、ということが示されているのです。新共同訳が訳された当時の Nestle-Aland 編の Novum Testamentum Graece 第26版も、以下に見ますように、この点ではまったく同じ判断をしています。新約聖書の原典そのものは世界のどこにも存在しておらず、六千近い大小の写本を比較検討して元来の原典を推定するという、本文批判(本文批評とも言いますが)と呼ばれる学問的な作業による「再構成された原典」しか、この世には存在しないのです。ですからその校訂本が改定されるたびに、「原典」も少しずつ「動いている」というのが実情なの

です。そして現在の学問的な本文批判的な判断によれば、3世紀のものであると考えられているボードメール・パピルス75も、4世紀のものと考えられているシナイ写本やヴァチカン写本などの重要な写本も、このルカ23・34のイエスの言葉を欠いている本文を証言しているために、この言葉が元来ルカ福音書に記されていたという事実の信憑性には大いに疑いがある、という判定がなされているのです。しかし、それをまったく削除してしまう（例えば上で見ましたマルコ15・21-32の中の15・28においてなされていますように、その節自体を削除してしまつて十字架の印（十）をつけてしまう、つまりその読みを葬って墓に十字架が立っているような形にしてしまう）のは忍びない、というわけで、新共同訳はこうして〔 〕を付けて、保留つきではありますがそれを残しています。Nestle-Aland 26版も、やはりこの部分に『 』をつけ、それが「オリジナルのテキストの一部分でないことは周知のことである」が、「ただただその古い成立と伝統と尊厳のゆえに」、脚注ではなくて本文中にそれは置かれている、としています（44\*頁）。

いずれにしても、ルカ福音書はイエスの十字架上の言葉を、あとで見ますように謎の多い「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びとしてではなくて、神への信頼に満ちた、また人々への愛と思いやりに満ちた言葉として記しました。このほうが余計な誤解を招くこともなく、キリスト教の優れた点を前面に押し出すことになる、という理由で大いに喜ぶ人も多いでしょうが、しかし、下敷きとなっていたマルコ福音書のとらえ方をこのように「直接肯定的」な描写にだけ変えてしまつてほんとうによいかどうか、私には甚だ疑問だと思われまふ。それは私が強調したいマルコの「逆説」的なとらえ方をまったく無視してしまうことになるからです。

### ヨハネ福音書の描写

その点について述べる前に、あとひとつの福音書であるヨハネ福音書の描写について簡単にふれておきたいと思ひます。ヨハネ福音書はすでに申し上げましたように、他の三つの福音書とは、その独特な冒頭の書き出しである

「初めに言があった」からしても明らかなように、大いに異なった内容を持ち、独自の描写をなしています。ヨハネ19・16-30の部分を見てみましょう。

こうして、彼らはイエスを引き取った。イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。しかし、ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取ってみたが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、

「彼らはわたしの服を分け合い、  
わたしの衣服のことでくじを引いた」

という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロバの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソブに付け、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受けると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

イエスが二人の男とともに十字架につけられた際のヨハネ福音書の細部の描写は独特であり、とくに共観福音書のようにイエスの直弟子たちはすべてイエスを裏切って逃げてしまつて十字架の場面にはまったく残っていなかったと描くのではなく、イエスのいわゆる「愛弟子」は最後までイエスの母とともに十字架のもとに留まったとしており、さらにイエスの最後の言葉も、

「(わたしは) 渴く」と「成し遂げられた」のふたつであった、としています。新共同訳聖書の前の口語訳聖書は「成し遂げられた」を「すべては終わった」と訳していますが、これはすぐ前の「すべてのことが今や成し遂げられたのを知り」をも「今や万事が終わったことを知って」と訳していることに対応しています<sup>6)</sup>。どちらの訳を採るにせよ、つまり達成感を示すイエスの言葉とするのか、それともある意味での諦観を示すイエスの言葉とするのか、いずれにしても、イエスの十字架上の最後の言葉は、マルコ福音書／マタイ福音書が記している「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」とはまったく異なった言葉となっています。

#### 四福音書の描写についてのまとめ

こうして、四つの福音書が示しているイエスの最期についての描写は決して一様ではないということが明らかになったと思います。もう一度繰り返して言いますが、聖書の文書の記者たちはみな一様に同じことばかりを考え、そして述べているのではなく、むしろそれぞれが独自性をもった描写、表現をし、そして信仰告白をしているのだ、ということをしかりと肝に銘じておきたいと思います。それは、ここにいる私たち一人ひとりそれぞれ独自の個性を持った、決して一様ではない存在であるということを考えれば、あまりにも当然なことなのですが、ことが聖書のとらえ方についてとなると、そんなはずはない、聖書に齟齬や矛盾や相違があるはずがない、と思ってしまう人が意外と多いのです。しかしそうではないのです。種々の異なったとらえ方の中から、どれが聖書が本来言おうとしていることがらなのかについて、それぞれが主体的に責任をもって判断していく必要があるのです。「私は聖書に書かれていることはすべて書かれているとおりにそのまま信じてい

---

6) これと同種類の訳出の違いは、のちにふれるパウロの手紙の中の、ローマ10・4の部分で、新共同訳は「キリストは律法の目標であります」と訳すのに対して、口語訳は「キリストは律法の終りとなられたのである」と訳していることの中にも見出される。どちらも問題になっているギリシア語の動詞 *teleō* が「完成する」と同時に「終る」を意味し、したがってその名詞形である *telos* もまた「目標」と同時に「終り」をも意味することから生じてくる違いである。

ます」と言う人が時々いますが、そのような姿勢がどれほど美しく謙遜なものであったとしても、それは事実上はありえないことであり、またその言葉は、自分はまだ十分真剣には聖書を読んでいないということを露呈してしまっている、と言ってよいのではないかと私は思っています。

さて、私自身は、上で述べました四つの福音書のとらえ方のなかでは、マルコ福音書の極めてラディカルで「逆説」的なとらえ方が、聖書が伝えようとしている中心点を正鵠を射る仕方で言い表わしているのではないかと考えています。『広辞苑』で「逆説」を引いてみますと、まず第一に、「衆人の受容している通説、一般に真理と認められるものに反する説」とあり、『『貧しき者は幸いである』の類」と続いています。そして次に、「また、真理に反しているようであるが、よく吟味すれば真理である説」とされ、『『急がば回れ』『負けるが勝ち』の類」と続けられています。前者の「貧しき者は幸いである」とは、周知のように生前のイエスが語った言葉なのでありますが(ルカ6・20)、『広辞苑』はキリスト教の辞典ではありませんので、さすがにそれを第二のカテゴリーに入れることはしていません。しかしイエスは、そして聖書は、その「逆説」こそが、「よく吟味すれば真理である説」なのだ、と言おうとしているのです。

「逆説」と言うと、私はすぐに増田明美さんの言葉を思い起こします。私はテレビでマラソンの中継を見るのが好きなのですが、それは、あの苛酷なまでに長い距離の、どこで、どのようにして、勝者はスパートをするのか、ということを観察するのが、とても興味深いからです。女子マラソンの中継では、しばしば増田明美さんが解説者を務めてくれるのですが、彼女の優しさに満ちた素敵な声の解説はとても魅力的です。増田さん自身、かつて何度も日本記録を更新するなど、トラック出身のすばらしいマラソン・ランナーでありましたが、二回出場したオリンピックでは、あまり活躍することはできませんでした。結果として彼女の最後のマラソン・レースとなった大阪マラソンで、こんなことがあった、と彼女が新聞紙上で語っていました。先頭

からは遥かに引き離されて走っていた終盤、ひとりの男のどす黒い大きな声が突然彼女に向かって浴びせかけられたというのです。「ますだー、お前の時代はもう終わったんやー。」この粗野で冷酷で非情な罵声は彼女の胸に突き刺さりました。そして、あまりのショックで彼女はほとんど走れなくなりそうになったそうです。しかし最後の死力を振り絞って彼女は、涙を流しながら走り続け、そしてゴールしました。そのレースの記録は、彼女のマラソン・キャリアのなかで最低のタイムだったそうです。しかし彼女は、この冷たい仕打ちに打ち勝って最後まで走り抜いたこのワースト記録のマラソンこそが、彼女の生涯の中でのベストなマラソンだった、と振り返って言うのです。「ワーストがベストである」、これこそが「逆説」です。

それと同様に、まさに生前のイエスの「貧しい者は幸いである」との言葉のように、十字架の上で何の奇跡も起こすことなく「貧しく」絶叫して死に果てたイエス・キリストこそが「神の子」なのだ、というのは、まさに「逆説」以外の何物でもありません。しかし、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」というイエスの十字架上の絶叫は、決してイエスの絶望的な叫びなどではなかった、という解釈もあります。すなわち、それは旧約聖書の詩篇22篇の冒頭の句であり、当時は詩篇の冒頭の句を朗詠することはその詩篇の全体を詠うことを意味したのであり、イエスもまた実は詩篇22篇の全体を詠おうとしたのだ、そしてその詩篇22篇をずっとたどっていくと最後には神への賛美になっていきますので——これは「詩篇」(Psalmos＝賛美)ですので、最後にはすべてが神への賛美になっていっているわけですが——、出だしはどうであれ、これはイエスの絶望の言葉ではなくて神への賛美の言葉なのだ、というような解釈です。典型的には遠藤周作の『イエスの生涯』<sup>7)</sup>の中に書かれている、日本ではつとに有名になっている解釈です。しかし遠藤周作は名前を挙げることをしてはいませんが、実はこれは私の恩師であられます荒井猷先生の、そのまた恩師であるドイツのE・シュタウファー(E. Stauffer)先生の解釈です<sup>8)</sup>。しかしシュタウファー先生のこうい

7) (新潮文庫)新潮社、1973年、参照。

う解釈は新約聖書学会ではほとんど全く受け入れられていませんし、シュタウファー先生をとても尊敬されている荒井先生もまた、それを受け入れてはおられません。第一もしもそういう賛美をこそ詠みたいというのならば、このような絶望的な言葉で始まる詩篇を選ぶ必然性などまったくないだろう、と私には思われます。

今日資料として用意しました二枚のプリントのうち一枚は、アリストター・E・マクグラス (Alister E. McGrath) 先生の『十字架の謎・キリスト教の核心』<sup>8)</sup>からの引用文ですが、マクグラス先生がイエスの最期に関して言われている以下のような内容は、非常に説得力のあるものと私には思われます。先生はオックスフォード大学の神学部の教授ですが、分子生物物理学でも博士号を持っておられるという稀有な方で、神学の研究はルターの「十字架の神学」についての研究から始められました。そしてこの『十字架の謎』という本は、ルターの「十字架の神学」に基づいたマクグラス先生自身の基本的な姿勢を示しており、非常に重要なものであると私は考えております。マクグラス先生の著作は最近、10冊以上が日本語に翻訳されていますが、翻訳者の方々の中には福音派や保守的なの方々が多いように思われ、本当にルター的なラディカルな理解が先生の根本のところにあるということを正確に見抜いてくれているのだろうか、少々危惧を抱かせております。それはともかく、そのマクグラス先生は、十字架上でイエスが叫んでおられたときに、「神はどこにいたのか」と問われます。そして神は「誰も予想していない場所に」すなわち「イエス・キリストの十字架の苦しみと恥辱と、屈辱と無力さと愚かさの中に」いることを選んだのだ、と言われます。そしてこう続けられます。

<神が不在に思えたのは、私たちが予期したようなやり方で神が存在して

---

8) 『イエス・その人と歴史』、高柳伊三郎訳、日本基督教団出版局、1962年、187-189頁。

9) 本田峰子訳、教文館、2003年。

いなかったからです。『ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです』（I コリント 1・27-28）> (212頁)。

マクグラス先生はお気づきになっておられるかどうか分かりませんが、私にとってこれは極めて重要な論理の展開の仕方です。つまりマクグラス先生は、イエスの十字架とは何かということを説明するために、イエス以後の、次に私たちが扱おうとしていますパウロの言葉を引用して用いているのです。パウロが第一コリント 1・27-28で書いている「逆説的な神の法則」、あるいは「逆説的な生命の法則」と私はそれを呼びたいと思っているのですが、それこそが、実はイエスの十字架においてもやはり貫徹されていた、ということです。ということはすなわち、第一コリント 1・27-28において典型的に語られているこのような「逆説的な生命の法則」を、神はイエス以前に、そう、太初の昔に、創造の基に置いてくださったのだ、ということの意味しています。そしてその神の法則こそが、イエスの十字架をも貫徹し、そしてもちろん今もすべての出来事を貫徹しているのです。そしてイエスの十字架においてもこの神の法則が貫徹されていたということは、すなわち、神が「イエス・キリストの十字架の苦しみと恥辱と、屈辱と無力さと愚かさの中に」いることを選ばれるほどに、十字架に対して「然り」を言っておられる、ということの意味しています。そしてこの「然り」こそは、まさに私たちが信仰において告白しているところのイエスの「復活」の内実、すなわち「神はそのようなイエスをこそ復活させられたのだ」ということ、を意味しています。

ですからマクグラス先生は、さらに続けてこのように言われます。213頁から引用します。

くひとつの重要な点で、キリスト教徒が味わう十字架の経験は、イエス・

キリストの十字架と復活によって変容させられるのです。私たちは、十字架を、復活の視点から見ることができ、あの十字架の暗さを、復活の香気の中かで見ることを許されているのです。……復活の後、十字架はまるで異なった光に照らして見られるようになりました——それは、私たちが今十字架を見ているのと同じ光です。>

しかし、イエスご自身の十字架に関しては、マクグラス先生は、それは私たちがいま「復活の香気」の中かで見ている十字架とはまったく異なっていたのだ、と明言されます。

くけれども、イエス・キリストは、十字架をその完全な暗さと絶望のうちで経験しました。彼は、私たちが今「復活に至る十字架」として経験するものを、純然たる「十字架」として、経験したのです。> (213頁)

別の言い方をすれば、イエスはまるで「役者」のようにして、「復活へと至るシナリオ」をしっかりとご存知の上で十字架上で絶叫しておられる、などということではまったくなかった、ということです。役者のことをギリシア語ではヒュポクリテース (hypokritēs) と言いますが、それは英語で言う hypocrite、つまり「偽善者」という単語の原語です。もしも復活へと至るすべての筋道が、シナリオのようにわかっているのに絶叫しているのだとしたら、イエスは役者、否、偽善者そのものだということになってしまいます。そんなことをイエスはそこでしておられたのでは決してないだろうと私は思います。そうではなくて、イエスは本当に絶叫しておられたのです。「これまであなたの御心だと思って自分は神の国の福音を宣べ伝えてきたのに、その帰結がこのような惨めな十字架の死なのですか。なぜなのですか。あなたは私を見捨てられたのですか」と絶叫しながらイエスは死んでいかれたのだ、と私は解釈したいとします<sup>10)</sup>。十字架のイエスは、「完全な暗さと絶望の

---

10) 大貫隆『イエスという経験』、岩波書店、2003年、215頁は、私などにおいては「イエスが何に絶望したのか」が明確でないとい指摘しているが、端的に言ってこれが私の考えである。

うちに」あられたのであり、先に引用した文章からすれば、「十字架の苦しみと恥辱と、屈辱と無力さと愚かさの中に」あられたのです。

勝利者や神への信仰を貫徹する敬虔な英雄的存在ではまったくなくて、まさにその正反対の無力な存在であった十字架のイエスこそが「神の子」なのだ、というマルコ福音書が主張する「逆説」が、やはりイエスの最期においては貫徹しているのであり、その意味でマルコ福音書の描くイエスの十字架の場面の描写が、最もキリスト教に本質的なことがらを正確に示している、と言えるのではないかと私は考えています。

もう一枚用意しましたプリントは、大貫隆さんがつい最近の岩波書店の『図書』(2010年10月号)に書いておられる「イエスの絶叫をめぐって」というエッセー風の文章です<sup>11)</sup>。その中で大貫さんは、彼の『イエスという経験』<sup>12)</sup>の中で彼が展開した、イエスは「自分自身にとって意味不明の謎の死を死んだのである」、「イエスの生涯は未決の問いで終わったのである」という考え方を紹介したあとで、彼の友人のドイツの新約聖書学者ゲルト・タイセン教授が、大貫さんのこの本の英語版<sup>13)</sup>に推薦・紹介文<sup>14)</sup>を書いてくれたことにふれています。その中でタイセン教授は、大貫さんの捉え方に並行する解釈をしているユルゲン・モルトマンの『十字架につけられた神』<sup>15)</sup>に言及しているのですが、その中に大貫さんは、イエスの生涯は「神に対する未決のまま開かれた問いで終わっている」という、ほとんど字句通り、大貫さんのとらえ方と同じ発言を見出しています。「未決の問い」ですから、当然のことながら、それは自らの死を「贖罪論的」ととらえる見方を含んではおりません。むしろ大貫さんは、次のような、無視できない重要性を持っているモ

---

11) 2 - 5 頁。

12) (上注10) 215頁。

13) Takashi Onuki, *Jesus' Time. The Image Network of the Historical Jesus* (Emory Studies in Early Christianity), Blandford Forum UK, Deo Publishing 2009.

14) Gerd Theissen, "Foreword. The Shattered and Rebuilt Images of Jesus. An Introduction to Takashi Onuki's Interpretation of Jesus", *op.cit.* pp. xiii - xxviii.

15) 喜田川信・土屋清・大橋秀夫訳、新教出版社、1976年。

ルトマンの発言に言及します。

＜伝統的な贖罪信仰からはイエスの復活の内的必然性を説明することができない。そもそも犠牲の供え物の復活などということは、語りえないからである（邦訳249頁）＞。（4頁）

実際、神自身が人間の罪の贖いのために自らのひとり子を犠牲の供え物としたというのなら、その供え物はいつまでもそれとしてそこにあるからこそ意義を持つわけでありまして、それがその意義はもはや終了したとでも言わんばかりに神自身によって「復活させられる」ということが生起するなどというのは、論理的にも納得できるような仕方では説明はできないでありましょう。イエスが最後まで神に対して「従順」であられたから神はそのイエスを復活させたのだ、という論理は、例えばフィリピ2・6-11のいわゆる「キリスト讃歌」の中に見出すことができますが、しかしその「讃歌」の中には「贖罪論的」なとらえ方の片鱗も見出すことはできません。モルトマンはそれでも「贖罪」という「概念」は捨て去ろうとは思わない、と言って、3つの理由を挙げています。ここではそれについて述べる余裕はありませんが、私にはそれはまったく説得的なものとは思えません<sup>16)</sup>。

大貫さんはさらに続けて、『図書』のエッセーの中でこう記しています。

＜伝統的・規範的な贖罪信仰を相対化するという点では、ルネ・ジラル（René Girard）の供犠論とそれに関連した所論も真剣な傾聴に値する。ジラルの『暴力と聖なるもの』（原著1972年、邦訳・法政大学出版社、1982年）によれば、供犠とはいけにえによって共同体内の内的緊張、怨恨、敵対関係といった相互間の攻撃傾向を吸収する集団的転移作用のことである。さらに、『世の初めから隠されていること』（原著1978年、邦訳・法政大学出版社、1984年）によれば、新約聖書のヘブライ人への手紙以降のキリスト教は、父

---

16) その問題については、拙著『「十字架の神学」の展開』（上注2）、372頁以下で論じた。

なる神がそのような供犠として、自分に一番親しい子なる神の血を求める「供犠的キリスト教」であり、その特徴は人間の暴力ではなくて神の暴力である。イエスの受難を贖罪のための供犠とみなしてきたこと、それこそが歴史的にみたキリスト教が迫害者の性格のものであり続けてきた原因だとジラルは言う。(中略、青野)ジラルによれば、そのような供犠を求める神は事実「死んでしまうことが必要」である。ただし、その神は福音書のイエスが告知した神ではない。彼の十字架上の死も、あらゆる種類の供犠に逆らった完全に非供犠的な死である。それを解明し、挫折と見えたイエスの刑死の中に隠された神の勝利を認めたのは、パウロ一人だった。こうして、イエスとパウロにおいては、「神の暴力」、すなわち供犠の要求が終結している。ところが、そのイエスとパウロはやがてヘブライ人への手紙を筆頭とする「供犠的キリスト教」によって覆い隠されてしまった。> (4頁)

ヘブライ人への手紙についての考察をなすことはここではできません。また、最初期キリスト教においていかにして供犠的な、すなわち贖罪論的なイエスの死の理解が成立するに至ったのかという問題についても、ここでは残念ながらふれることはできません<sup>17)</sup>。パウロが「十字架」上のイエスの死を

---

17) その成立の際には、旧約聖書のイザヤ書53章が「苦難の僕」について語っている内容が、大きな役割を果たしたことはほぼ確実であろうと思われる(大貫隆『イエスの時』、岩波書店、2006年、144頁参照)。ただし、贖罪論に対して否定的なルカが、使徒行伝8・32-33でイザヤ書53章を引用しながらも、わざわざ贖罪論的でない部分を引用していることはよく知られている。また農村伝道神学校校長の高柳富夫氏によれば、氏が現在翻訳中のNew Century Bible Commentaryシリーズ中のR. N. Whybrayによる第二イザヤの注解書(日本キリスト教団出版局から近刊)は、イザヤ書53章をまったく非贖罪論的に解釈しているとのことである。ついでながら、脳科学者の茂木健一郎氏は、季刊誌『考える人』32号(2010年4月)、71頁で、イザヤ書53章について次のような注目すべき、贖罪論にはまったく連らならない発言をしている。『「彼は人々から軽蔑され、拒絶された。」(イザヤ書53・3)／一つの言葉の意味が、長い年月を経て深まることがある。旧約聖書イザヤ書の中に見られる『彼は人々から軽蔑され、拒絶された』という言葉も、青春時代から慣れ親しんでいて、しかしその核心が判然としたのは四十を過ぎた頃だった。／イエスが現れる前に書かれたこの言葉は、いわば『来るべきものの予言』。救世主を、人々から『軽蔑され、拒絶された』と記述するところに、キリスト教と、それを滋養として発展してきた西洋文明の底力がある。／徹底した、美しい

非供犠的に解明し、「挫折と見えたイエスの刑死の中に隠された神の勝利を認めた」、ということについては、以下でさらに述べたいと思います<sup>18)</sup>。しかし、キリスト教が持つ「迫害者の性格」の指摘は、贖罪論を批判する私のような者に対して正統主義者から投げつけられる「暴力」的とも言うべき非難の言葉を想起するとき、首肯せざるを得ないように思われます。そしてさらに、大貫さんがそれに続けている次のような重要な文章に、私たちは深く注目しなければならないと思わされます。

くジラルールのこの命題に、実は故ポール・リクール (Paul Ricœur) が賛同していた。死後に刊行された『死まで生き生きと — 死と復活についての省察と断章』(久米博訳、新教出版社、2010年) では、こう述べている。

神は死に値する罪のために、人間に贖罪を要求し、この贖罪を父なる神の子がわれわれの「身代わり」となって死ぬことのうちに見出すのか。わが論証エネルギーの大部分は (中略) この供犠理論への抗議に費やされていると言わねばならない。私は供犠理論に、信仰の最悪の用法を見る (105頁、ただし、文言を少し変更している)。

久米博氏からの私信によれば、本邦未訳の対話集『批判と確信』の中には、「供犠の伝統全体を、贈与から考え直す必要がある。いずれにしても贈与

---

までに凄まじい個人主義。決して、予定調和ではない。社会から蔑まれ、追い出される者こそが天に通じる者である。このような、レールから外れた存在を許容し、ぎりぎりのところで賞賛する形而上学が、形而下に変換されることで多くの独創的天才に結実した。／結婚式など、表面的なキリスト教の文化は受け入れても、根幹の部分では感化されない日本人。イザヤ書に現れた個人主義の厳しさとよろこびも、日本には無縁である。』

18) ここでは、ジラルールが『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』、岩切正一郎訳、新教出版社、2008年、294-295頁、においても、「十字架の狂気と叡智についてのパウロの『パラドックス』」や、「われわれの文化的世界の真の非神話化 [= 覚醒]、十字架にしか起源を持つことのできない非神話化」がすでに明らかになっている箇所として、「十字架の言」についてパウロが語る第一コリント 1・18-25を最後に引用してこの著書を終っていることにだけ注目しておきたい。

こそ、血の代償が必要であったという復讐の観念に勝らねばならない」とあるそうである。こうしてリクールは命の贈与の神学を提唱している。>(4—5頁)

最後の論点は、すでに、上掲の『死まで生き生きと』<sup>19)</sup>の「供犠の神学から命の贈与の神学へ」の段落において展開されていますし、また久米博先生は、『福音と世界』2008年6月号<sup>20)</sup>において、贖罪論一辺倒のとらえ方を批判する大貫隆氏や私青野の名前を挙げながら、同じリクールのとらえ方について言及しておられます。リクールのような聖書解釈学の大家<sup>21)</sup>のこのような主張には、私たちが深く傾聴しなくてはならないものが厳としてある、と言わざるを得ないでしょう<sup>22)</sup>。

---

19) 久米博訳、新教出版社、2010年、150頁以下。

20) 『死まで生き生きと』— 死と復活をめぐるポール・リクール晩年の思索 — その2』、47—54頁。

21) ポール・リクール『聖書解釈学』、久米博・佐々木啓訳、ヨルダン社、1995年、参照。

22) 2010年9月に日本新約学会の招きで来日されたゲルト・タイセン教授は、西南学院大学において開催された日本新約学会第50回記念大会の前日の9月9日に行なわれた西南学院大学学術研究所主催の英語による学術講演会「史的イエスとケーリュグマ——学問的構成と信仰への道」のあとに持たれた質疑応答の中で、神が自らの子なるイエス・キリストの血を人間の罪の贖いのために必要とされた、という考え方について、「それは、言うならば、非常に陰惨な神学 [a very dark and triste theology] です。一人の人を殺して人類を救う神というのは、私の [信じる] 神ではありません。」と答えておられたのは印象的であった(本論集所収のタイセン教授の講演再録を参照)。私はこの triste なる英単語を今まで聞いたことも見たこともなかったもので、その意味は私には不明であったが、通訳の須藤伊知郎教授は、「今タイセン先生は triste と言われました」とコメントしながら、「悲惨で、わびしい」という意味を見事に正確に訳出された。拙論『「十字架の神学」と贖罪論』『西南学院大学神学論集』67巻1号、2010年、37頁、注12で言及した12世紀のピエール・アベラールの言葉、「実際、だれかが罪のない者の血を何ごとかの代価として要求するなどということ、あるいは、罪のない者が殺されることがその人を喜ばせるなどということ、ましてや神がご自身のみ子の死をかくもふさわしいものと考えられるので、そのことによって神は、この世全体と和解されるのだ、などという考えは、なんと残酷で、なんと邪(よこし)まなものと思われることか」、をも参照。

## Ⅱ. パウロにおける「十字架」<sup>23)</sup>

では新約聖書中最古の文書である「パウロ書簡」は、イエスの「十字架」について何を語っているのでしょうか。パウロについて考える際に、まず頭に入れておかなければならないことは、パウロはイエスの「直弟子」ではなかったということ、それどころか最初はキリスト教徒を激しく迫害した熱狂的なユダヤ教徒であったということ、しかし「ミイラとりがミイラになる」ような形でキリスト教徒へと「回心」したということ、したがってイエスに関して彼が入手することができた情報は二次的なものであったということ、などです<sup>24)</sup>。

なぜならば、たしかに彼は「イエスの死は贖罪死である」との理解を証言してはいますが、しかし第一コリント15・3-5から明らかなように、彼は彼の先達からそれを継承しているのだからです。それは明らかに初代の教会の「信仰告白定型」（それをギリシア語でケーリュグマ、ラテン語でクレドーと言いますが）であり、そこでは「キリストは私たちの罪のために死んでくださった」という言い方がはっきりとなされます。それをパウロは先達から受け、そしてそれをあなた方に伝えた、しかも、最も大切なこととしてあなたがたに伝えたのだ、と語られています。

ところが、ここを「最も大切なこととして」と訳してよいかどうかは、決して自明のことではありません。というのは、それは直訳すれば「まず第一に」という意味だからです。ギリシア語ではエン・プロトイスとなっているのですが、プロトスとは「第一の」という意味です。ですから多くの英語訳が“First of all”と訳しています。もしも事柄において「第一の」というのであるのならば、それは当然「最も大切なこととして」となってもよいのですが、もしも時間的な意味で「まず第一に」であるとしたら、「私はま

---

23) 以下のパウロに関する考察は、多くの部分で、拙論『「十字架の神学」と贖罪論』（上注22）、19-59頁と内容的に重複していることをお断りしておく。読者のご寛恕を乞う次第である。

24) パウロについては、拙訳著『パウロ書簡』（『新約聖書Ⅳ』）、岩波書店、1996年、233頁以下の「解説」を参照。

ず第一に先達から受けたことをあなたがたに伝えたいけれども、しかし実はもっと大事だと自分が考えていることがらがあるので、それをこそ私はあなたがたに伝えたいのだ」、とパウロがここで言おうとしている可能性があることになるのです。

「もっと大事だと自分が考えていることがら」とはいったい何なのかについては以下さらに見ていきたいと思います。その前に、このケーリュグマとの関連で、一つ最も典型的で重要なことがらとして指摘すべきことがあります。それは、このケーリュグマが語っている贖罪論における「罪」理解の特徴とパウロのそれとの間の違いは見逃すわけにはいかない、という点です。つまり第一コリント15・3-5に出てくる「私たちの罪のために死んでくださった」という言い方の中の「罪」は複数で語られているのですが、それがパウロ独自の罪理解とは必ずしも合致しない、ということです。パウロは「罪」（ギリシア語でハマルティアといい、もともとは「的はずれ」を意味する単語ですが）という単語を合計59回使っていますが、そのうち複数でその語を使うことはただの7回しかしていないのです（ローマ4・7、7・5、11・27、第一コリント15・3、17、ガラテヤ1・4、第一テサロニケ2・16）。それは、ここ第一コリント15・3以下に出てくるようなケーリュグマ伝承、およびその伝承の影響下にある文脈において、それから旧約聖書の引用において、そして「律法を通して働く罪」、「ユダヤ人の罪」というような、そうした表現をパウロがするときだけに限られています。どういうことかと言いますと、複数にできる罪とは、すなわち基本的にはユダヤ教の「律法」に対する「違反」の罪を指している、ということです。

つまり「律法違反の罪」というものは、「あれや、これやの違反を犯してしまった罪」のことですから、一つ、二つ、三つ、というふうに数え上げることができると、当然、複数にすることができます<sup>25)</sup>。ところが残りの52回の用法においては、パウロは必ずそれを単数で使います。なぜかと言

---

25) 大貫隆『イエスの時』(上注17)、147頁は、そこから「『信仰』もまた量的に計測可能なものとなっていく」と正確に指摘している。

ますと、パウロはそこでは律法違反の罪のことなどまったく考えてはいないからです。そうではなくて、むしろもうそれ以上は分割することのできない「根源的な罪」、「神の前における根源的な倒錯」、「根源的な傲慢・高慢」、そういう意味での「罪」をパウロは考えていたからです<sup>26)</sup>。そして、そうした単数の「罪」理解が贖罪論と結合している箇所はまったくなく、複数の「罪」だけが贖罪論と結合しているのです。

ですから、第一コリント15・3-5はパウロが言っているとおり先達から受け継いだ伝承なのですが、そこで語られている「罪」とは、律法違反の罪としての複数の罪であり、そしてイエスはその罪のために死んでくださった、と理解されているのです。「贖い」という言葉はそこには出てきませんが、しかし「イエスは罪の贖いとなってくくださった」というのと同じ理解がそこにあることは確実でしょう。そしてパウロも、まずはそれを受け入れてはいます。しかし、「まず第一にそれを私はあなたがたに伝えたいけれども、しかしもっと大事なことがあると私は思っているのだ」という形で、彼の手紙の様々な箇所、単数の「罪」のゆるし、ローマ4・1-8に見られますような「不信心で神なき者の無条件の義認」という意味での「信仰義認論」を、そしてさらにはその根底にある、先取りして言いますが、彼の「十字架の神学」を、パウロは展開しているのではないかと私は考えているのです。

パウロの「罪」理解がこのようなものだとしますと、律法違反の罪、つまり律法をまったく正当なものとして受け止めた上で、その違反を問い、その違反のためにイエスが贖いとなってくくださったのだ、というような理解を、パウロが全面的に肯定するはずはありません。事実、「律法」を批判的に捉える視点がパウロの中にははっきりと見られるからです。

もっともパウロの律法理解には、非常にアンビバレント（両義的）なところがあり、ローマ書7章等々で、それは非常に緊張を孕んだ形で語られています。つまり、律法は「聖」なるものである、しかし同時にそれは、罪を来

---

26) 大貫隆『イエスの時』（上注17）、169頁も、それを「根源的な『罪』」と表現している。

たらせるもの、律法さえなかったならば罪が働く機会はなかっただろう、というふうにさえ言われるほどに否定的なものでもあるのです。ですから、パウロが律法を全面的に「聖」なるもの、それゆえに全面的に肯定的なものとして理解しているわけではないことは明らかです<sup>27)</sup>。そしてそれゆえに、そのような律法に対する違反を贖うというユダヤ的な思想が彼の中心思想になっていたというようなことは、ほとんどあり得ないことだと私には思われます。

ではパウロにとって特徴的な「十字架」理解とはどのようなものだったのでしょうか。私はそれを「十字架の神学」と呼びたいのですが、そういう言い方は、16世紀ドイツの宗教改革者マルティン・ルター (Martin Luther) が用いたラテン語のテクニカル・タームである *theologia crucis* です。「十字架」のことをラテン語で *crux* と言いますが、その属格 (所有格)、つまり「十字架の」は *crucis* となります。しかし、ルターがそれでもって言っていることからは、私は教会史家ではなくて新約聖書学が専門の者なのですが、新約聖書の中でパウロが語っている「十字架」理解と極めて深く通低しているように思われます。というよりも、ルターという人はパウロの「十字架」理解、つまりパウロの「十字架の神学」を非常に深く正確に理解した人だったのではないか、と私には思われるのです。

この「十字架の神学」という理解の基本的なところには、言うまでもなくイエスの「死」をどう理解するかという問題があります。しかし、「イエスの死」と「イエスの十字架」、つまりこの「死」(ギリシア語で *thanatos*。「死生学」のことを *thanatology* と言うのはそのためです) と「十字架」(ギリシア語で *stauros*) という単語は、歴史的事実そのものとしては当然のことながら同じイエスの死、イエスの十字架上の死を指すわけですが、ところがそれが「死」として言い表わされた場合と、「十字架」として言い表わされた場合とでは、それぞれが持っている意味内容がほとんどまったく異なったも

---

27) パウロにおける「聖」の概念の定義も、例えば第一コリント7・14における *hagios*, *hagiazō* の用法を見れば、あまり単純化してなさないほうがよいであろう。

のになっている、という事実があるのです。ですから、その二つは厳密に区別されなければならないのだ、という基本的な認識を私たちは持たなければならないのです。

つまり、二つは交換可能ではないのです。「イエスの十字架」と言われているところを「イエスの死」というふうに言い換えても一向に意味は変わらないし「イエスの死」と言われているところを「イエスの十字架」と言い換えても一向に構わない、などということでは決してないのです。そうではなくて、それぞれがそれぞれに特有の意味合いを持っているのです。特に「十字架」という単語は、そのような特別な意味合いを強固に持っているのです。こうしたことがらが、基本的な認識として私にはあるのです。

私はこのような認識に、パウロ書簡の釈義を通して到達いたしました。そして私は、これを自分で発見したとしばらくは思っておりました。しかし実際には私よりも5年ほど前に、ドイツのハインツ・ヴォルフガング・クーン(H.-W. Kuhn)<sup>28)</sup>という先生がひとつの論文<sup>29)</sup>を書いておられまして、その中で彼は、この区別をしている先駆者たちの名前を挙げた上で、「この二つは厳密に区別されなければならない。しかし残念ながらその区別は、繰り返し繰り返し無視されてきており、見過ごしにされている」と嘆いておられました(28頁)。以前からそういう指摘があったにもかかわらず、私自身も含めてそのことに大きな注目をなすということをはほとんどして来なかったのです。現在の私は口を酸っぱくしてそのことを言っていますが、しかしそれに注目する人は、依然としてそう多くはありません<sup>30)</sup>。

では、イエスの「死」と「十字架」とは厳密に区別されなくてはならないとは、いったいなぜなのでありましょうか。それは以下のような理由によります。すなわち、イエスの「死」が「十字架」あるいは「十字架の死」とし

28) 拙論『『十字架の神学』と贖罪論』(上注22)、19-59頁中、22頁で、H. -W. Kuhn 教授の名前を「ハンス・ヴェルナー・クーン」と記してしまいましたが、これは私のまったくの記憶違いによる誤記であり、お詫びして訂正しておきたい。

29) Jesus als Gekreuzigter in der frühchristlichen Verkündigung bis zur Mitte des 2. Jahrhunderts, ZThK 72, 1975, 1-46.

30) 大貫隆『イエスの時』(上注17)は、153頁以下で、両者の違いを的確に強調している。

て言い表わされたときには、それは、「弱さである、愚かさである、躓きである、呪いである（ただし「神による呪い」ではなくて「律法による呪い」ではあるのですが）」と、さしあたっては否定的に、ネガティブにとらえられるのです。しかし、それはそのまま否定的であり続けるわけでは決してなくて、逆説的に、「そのような弱さこそが真の強さであり、愚かさこそが本当の賢さであり、その躓きこそが本当の意味での救いであり、その呪いこそが、真の意味での祝福なのだ」（第一コリント1・18-25、第二コリント13・4、ガラテヤ3・13）というふうに展開がなされていくのです。もちろんそのような展開は、神の目からご覧になればそのような「逆説」がすべてのことがらにおいて貫徹されているのだ、という、神の意志の啓示に基づく確信に基礎づけられているのは言うまでもありません。イエスが、そしてパウロが「神」と呼ばれた絶対者は、常にそのような「逆説的な現実」こそが真実の現実なのだ、と宣言してくださっているのです。すべては神のそのような「宣言」に基づいているのです。それはさきに「逆説的な生命の法則」と私が呼んだ現実であると言ってもよいでありましょう。

私たちはしばしば、「イエス様は私たちのために、あるいは私たちの罪のために、あるいは罪の贖いとして、十字架にかかって死んでくださいました」、あるいは「イエス様は十字架の上で尊い血を流して私たちの罪を贖ってくださいました」、などと口にしまして、それによって贖罪論を「十字架にかかって」とか「十字架の上で」という言葉と結合させながら語ることをいたします。そしてそれは、厳密さを要請される神学者の文章の中にすらもしばしば登場してくる言い方なのですが、しかし実はそういう言い方が新約聖書の中にはまったくない、という驚くべき事実があるということに、多くの人は気づいていません。「十字架」と「贖罪論」の結合は、まったくないのです。「ない」と言うと、「そんなことはないだろう」と、皆さんほとんどが言われるのですが、ほんとうにありません。ペテロの第一の手紙2・24が「十字架」の語と贖罪論の結合があるかのように訳出されておりますために（新共同訳でも口語訳でも）、「ここにあるではないか」と言われる人がいるのですが、しかしそこでは「十字架」という単語はまったく使われてはおりませ

ん。ただ「木」(ksylon) という単語が使われているのみです。

ともかく、新約聖書の中には「イエス様は私たちのために、あるいは、私たちの罪のために、＜十字架にかかって＞死んでくださった」という言い方はありません。なぜないのだろうか、ということをお私はずっと考え続けてきたのですが、それはおそらく、十字架とはあまりに悲惨で、残酷極まりない処刑の道具でありましたから、イエスが私たちのためにあのむごたらしい死を死んでくださったということを「十字架」という単語を用いながら「直接肯定的に」語るということ、やはり初代の信徒たちはなし得なかったからではないだろうか、と今は考えています。しかし時代を経るにしたがって、十字架もきれいなシンボルになり、教会の上にも飾られるようになり、ペンダントにもなって、十字架刑のむごたらしさが忘れ去られてしまったときに、「イエスは十字架の上で、十字架にかかって、私たちのために死んでくださった」という言い方が成立してきたのではないのでしょうか。

このことは、フランス革命の際に死刑の道具として用いられた「ギロチン (guillotine)」のことを類比的に考えれば、納得がいくのではないかと思います。ヨーロッパの博物館にいけますと、鋭い刃を持った重い石のような鉄の斧を落下させることによって下に寝かされた受刑者の首を刎 (は) ねるといふ恐ろしい死刑の道具であるギロチンが展示されているのを目にすることがあります。それは私たちに身の毛のよだつような思いを与える残酷な斬首台で、「ギロチン」という名前が持つ響きそのものの中にもそのような残酷さが内包されているかのように感じます。ですから、まったくの仮の話ですが、もしも誰かが「私の代わりに」あるいは「私のために」このギロチンによって処刑されたということがあった場合に、助けられたその私は、「彼は私に代わって、あるいは私のために、死んでくださった」とは言うことはできたとしても、「彼は私に代わってギロチンにかかって死んでくださった」とは容易には言うことができなかつた、というような事情に類似しているのではないかと私には思われるのです。

しかし、イエスは、「死んでくださった」わけではありませんでした。後でもさらにふれますが、イエスは十字架の上で無残にも「殺された」のでし

た。イエスは「殺害されたのだ」という、その事実が曖昧になってしまうということ、やはり贖罪論が孕んでいるひとつの大きな問題性として私たちはとらえなければならぬだろうと思います。なぜならばそのとき、その「殺害」を不可避的に惹起したものの、すなわちそれは歴史のイエスの言行以外の何物でもなかったのですが、それに対して私たちが持つべき深い関心が決定的に欠落していく危険性がそこに潜んでいるからです。

贖罪論は本来あるべき位置に置かれるべきなのです。つまり、贖罪論が新約聖書の使信のすべてではないのです。仮に贖罪論を採用するとしても、私がいま申し上げていますような「十字架の神学」との関わりの中でそれは展開されなければならないのではないか、と私は思います。それが、贖罪論を本来あるべき位置に置くという言い方でもって、私が意図している内容です。

「十字架」に含まれている上に述べました「逆説」が典型的に言い表わされているのは、第二コリント12・8-10においてです。自分の身に肉体の「とげ」を与えられていたパウロは、「これを離れ去らせてほしい」と復活の主に願ったときに、「私の恵みはあなたにとって十分である。なぜなら力は弱さの中でこそ完全になるのだからである」（9節）（岩波訳）という言葉を読んだ、と記していますが、その復活の主の言葉の中に言い表わされている「逆説」です。「力は弱さの中でこそ完全になる」。これを受けてパウロは、「だから、キリストの力がわたしの上に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしはもろもろの弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、そして行き詰まりとを、キリストのために喜びます。なぜなら、わたしが弱いとき、その時にこそわたしは強いからです」（9b-10節）と語ります。

ところが、この第二コリント12・8の、「すると主は、『わたしの恵みはあなたにとって十分である。なぜなら力は弱さの中でこそ完全になるのだからである』と言われました」の中、「言われました」の部分、敬語を使わなければ「言った」の部分ですが、その箇所が、実はギリシア語では、過去の

一回的で点的な行為を表わす過去形（それをギリシア語ではアオリスト形と言うのですが）ではなくて、現在完了形になっている、ということは見逃すわけにはまいりません。

パウロが何かを過去のある一時点でお祈りしたときに、——英語で考えてみてほしいのですが——、誰々がこう「答えてくれた」と言うときに、現在完了形でもってそれを言い表わしたりしてはいけない、そういうことは絶対にやってはいけない、と皆さん、学校で教わったことと思います。しかしギリシア語の場合には、それは一向に構わないのです。ギリシア語の現在完了形で「主は言われました」と言い表わされている場合には、実は基本的には同じことが英語の現在完了形においても言えるのですが、過去のその「言った」という行為が今もなお影響を及ぼし続けている、つまり影響を受けた状態が継続している、ということが強く意味されています。つまり「言われた、そして今もそれは妥当している」という意味になるのです。英語で「私は10万円を失くしてしまいました」を過去形で *I lost 100,000 yen.* と言うのと、現在完了形で *I have lost 100,000 yen.* と言うのとでは、いったい意味はどう違うのでしょうか。私たちは多くの場合に、現在完了形は「私はちょうど今お金を失くしてしまったところですよ」というような意味を持っている、などと考えているのではないかと思います、それは決して正確なとらえ方ではありません。二つの間の違いはこういうことでしょうか。過去形のほうは、過去のある時点で自分は10万円を失くしてしまったということだけを言っているのでありまして、そのお金が現在どうなっているかということに関しては、何も語ってはおりません。それに対して現在完了形のほうは、誰かがそのお金を拾って警察に届けてくれたというようなことはまったく起こってはならず、したがってそのお金は自分の手許にまだ戻ってきてはいない、つまり依然としてそのお金を私が失なったということは続いている、という「継続」の意味を持っているのです。

ひとりの信徒の方が、大貫隆さんの『新約聖書ギリシア語入門』<sup>31)</sup>には、ギリシア語の現在完了では「継続」の意味はない、と書かれているが、私が

31) 岩波書店、2004年。

いま述べましたような内容はそれと矛盾するのではないか、との質問のお手紙をくださったことがありました。よく勉強しておられる信徒もいるのですね。しかし、大貫さんは私が次に述べようとしています「十字架につけられ給ひしままなるキリスト」という「継続」を意味する現在完了形の訳し方に対しては、『イエスの時』<sup>32)</sup>において賛同してくださっておりますので、「おかしいな」と思いながら大貫文法書を調べてみました。するとそこにはこのように書いてありました。「(ギリシア語の現在完了には) 英語の現在完了が持つ『経験』(今までに～したことがある)、あるいは「継続」(繰り返し～してきた)の意味はない」(70頁)、と。しかしこの場合の「継続」はむしろ「反復」と言表されるべきもので、ギリシア語の現在完了の用法の中に英語で言うところのこの「反復」の意味がないというのは、そのとおりでしょう。イエスは繰り返し繰り返し十字架につけられた、などというわけでは決してないからです。そして大貫さんも文法書の102頁で現在完了の分詞が示す「動作の種類」(Aktionsart)について、「主動詞が示す行為の時点よりも前に完了していて、その結果が主動詞の時点まで存続している行為を表す」と記しており、正しく「存続」という表現をしておられます<sup>33)</sup>。

32) 岩波書店、(上注17) 171、203頁。

33) この関連で、日本聖書学研究所の紀要である『聖書学論集42』(日本聖書学研究所、2010年)において吉田忍氏が、「イエスは十字架につけられているのか」という論文(263-287頁)の中で展開している、「十字架につけられ給ひしままなるキリスト」という私の捉え方は現在完了の意味を間違っているとらえている、との主張は、上述の大貫隆氏が言っている、英語の「繰り返し～してきた」という意味はギリシア語の現在完了にはない、ということ繰り返ししているにすぎない、ということには注目しておくなくてはならないであろう。吉田氏は新約聖書のギリシア語に関する最も信頼のおける文法書とみなされている Blass/Debrunner/Rehkopf, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, Göttingen 1975 を引用して(氏は BDR と略しているが、頁の指示はない。明らかに279頁の § 340 のことであろう)、「現在完了時制形は完了した動作の継続を表現する」という言い方を採用しているのだが(265頁)、それとほとんどまったく同じ表現をしている私に対しては、「青野は、『現在完了形は、完了した動作が今なお継続しているということを強く表現する言い方』と見做している点で誤っていると思われる」(275頁)と言う。そしてその理由を「『動作が今なお継続して』いなくても、現在に結果(／影響)が残っていれば現在完了時制形を用いても構わないのだ」(同頁)と言う。この発言は、「現在完了時制形となっている動詞が表す行為が現在において行われていなくてもかまわないという点は非常に重要である」(266頁、その他)という主張に基づい

ですから、上で述べました現在完了形で言い表わされる「言った」は、復

ている。しかし、このような言い方は、私に対する反論にはまったくならないと言わなくてはならない。なぜならば私は、「現在完了形となっている動詞が表わしている行為」すなわち「十字架につける」、この場合は「十字架につけられる」という「行為」が現在においても行なわれている(!)、つまり、イエスは「繰り返し繰り返し十字架につけられている」などとはまったく言ってはいないからである。むしろ「十字架につけられてしまった」という「完了した動作」は、「十字架につけられてしまっている」という、吉田氏も言っている「事態 (state of affairs)」(265頁)、すなわちそのような「状態」を生み出している以外にはあり得ないわけで、その「状態」が今もなお「継続」している、と私は言っているにすぎないのである。吉田氏は、現在完了形「十字架につけられた」ということの「結果」として、『(イエスが) 死んだこと、葬られたこと、3日目に起こされたこと、ケファに現れ……』という一連の出来事」(277頁)が考えられていると言い、さらには、この一連の出来事に加えて、ガラテヤ3・1の現在完了形は、「イエスが十字架につけられたこと、その結果として呪いとなったこと、更にその結果/影響としてキリスト者たちが『律法の呪い』から贖いだされたこと」を「暗に示すために用いられている」(287頁)と記しているが、こうなるとそれはもう「文法」ではなくて「釈義」と言うべきである。上注32で言及した大貫隆『イエスの時』171頁の「パウロが繰り返し『十字架につけられたキリスト』について語る時、ギリシア語の文法で言う現在完了受動分詞 (estaurōmenos) を用いるのは決して偶然ではない。それはすでに起きた出来事でありながら、その影響が現在まで及んでいることを表現している。文字通りには、『十字架につけられたままのキリスト』ということになる」、また203頁の「この意味で、『私はキリストと共に十字架につけられてしまっている』と『十字架につけられたままのキリスト』という二つの現在完了形は、……過去が現在まで継続していることを表している」、をも参照。また以下で言及するように「現在完了」という言い方はどういうわけかしないものの「イエスは十字架につけられた者として存在し続けている」と語るV・ファーンニッシュ(下注35)をも参照。私がマルコ16・6の並行箇所であるタイ28・5の「十字架につける」の現在完了受動形をその用法の回数の中に数え忘れたこと(これは吉田氏に指摘される前に私自身気がついて訂正できるところでは訂正してはいたが)を三度も指摘してくれている(指摘そのものに対しては感謝しているが、同じ論文の中の別々の箇所でも三回も同じ指摘をする必要はないであろう!)ということに典型的に表わされているように、吉田氏の論文の書き方は非常にまわりくどい。また『「過去の一回的な出来事」であるからと言ってアオリストが用いられるとは限らない」(275頁)ということを言うためにF. Staggのような二流の学者(故Frank Staggとは親交があったので敢えてこういう言い方をしている)の指摘などを持ち出してもらってもなく、そのことは、大学生時代に神田盾夫先生のあの悠揚迫らぬ解説とともに講読した名著J. H. Moulton, A Grammar of New Testament, Vol. I. Prolegomena (Third Edition), Edinburgh 1908 (1957)の140頁以下の、The Perfect used in place of Aorist/Ultimate decay of the Perfect/Perfect and Aorist used together/Aoristic Perfects in NT?などの部分が指摘していることであって、それはずっと私の頭の中にインプットされていることであり、私も重々承知しているところである。

活のイエスが「力は弱さの中でこそ完全になるのだ」という言葉を今もなお、繰り返し繰り返し反復して語っておられるという意味ではなくて、その内容が今もパウロの耳に響き渡っているという意味で、その影響が存続している、ということの意味しています<sup>34)</sup>。

「耳に響き渡っている」と言えば、皆さんのこの神戸には、あの大震災を忘れないための防災センターが建設されていますが、そこで私はこんな体験をなさった方のお話をお聞きました。そのセンターでは、あの大震災のときの地震の揺れがどんなに激烈なものであったのかを実際に体験できるようになっておりますが、その揺れは2005年3月に私どもが福岡で経験しました福岡県西方沖地震の比ではありませんでした。福岡でも「地が揺れる」と言うよりも「地が動く」という恐ろしい感じで、私の研究室の書籍は大部分本棚から落ちてしまったのですが、しかし神戸防災センターでの模擬体験は、ほとんど想像を絶するものでした。それはともかく、そこで「語り部」をしてくださっていた神戸バプテスト教会会員の栃尾さんの言葉を私は今でも忘れることができません。神戸での被災者の中には、地震後に発生した火災のゆえに亡くなられた方々も多かったそうなのですが、その方々は、瓦礫の下敷きになってもなお生存していることがわかっていたのに、消し止めることが出来なかった炎に巻かれて亡くなられたのでした。そして栃尾さんは、自分のお母さんがとうとう炎の中に包まれていってしまったときにひとりの少女が発した「おかあさーん」という悲痛な叫び声が今でも自分の耳に残っていて、どうしても忘れることが出来ません、と話してくださいました。

少女のこの声はとても悲しい叫びではありますが、パウロの耳に今なお響き渡っていた声は、彼の意表を突く、復活のイエスの極めて逆説的な言葉でした。そのような逆説的な内容の言葉を語ったとされる復活のイエスが、もしも天の玉座にドッカーリと座しているとしたら、それはとてもおかしいことになります。なぜならば、そうだとしますと、イエス自らが語っている言葉

---

34) 大貫隆『イエスの時』(上注17)、223頁は、私のこの「主の言葉が今なお耳に響いているニュアンスがある」というとらえ方(岩波書店版『新約聖書』、571頁)を肯定してくれている。

の内容と自らの現在の存在の在り様とが、全く乖離してしまっていることになるからです。それなのに、ローマ 8・34を、新共同訳は「(復活のキリストは) 神の右に座っておられる」と訳しており、口語訳もほぼ同様に「座している」と訳してしまっています。しかしギリシア語原文ではそのようなことはまったく書かれておりません。「神の右に在(いま)して」と文語訳聖書は正しく訳していますが、ただ「神の右にあって」としか書かれていません。つまりここでは *be* 動詞の *est* が使われているのみであって、「座る」というような動詞が使われているわけでは決してありません。パウロ以外の新約聖書の文書の中に「神の右に座し」という言い方があり、またそれが「使徒信条」の中でも採用されているのは事実ですから、それらに影響された上での翻訳なのかもしれませんが、しかしパウロの文章はそうに訳すわけにはいきません。

そしてパウロはさらに、上で先取りしてふれました「十字架につけられたキリスト」について語る際にも、「十字架につけられた」の部分で現在完了形の分詞を用いて表現しています。すなわちパウロは、第一コリント 1・23 と 2・2 で、「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのだ」、「十字架につけられたキリスト以外、私は何も知るまい」と語り、ガラテヤ 3・1 では、「十字架につけられたキリストがあなたがたの目の前に描き出されたのに、誰があなたがたをたぶらかしたのか」と語るのですが、その際 3 回とも、「十字架につけられた」をすべて *estaurōmenos* という現在完了形の分詞を用いて語っているのです。ですから、「十字架につけられたキリスト」も、文語訳聖書がガラテヤ 3・1 に関してだけではありますが正確に訳してくれていますように、「十字架につけられ給ひしままなるキリスト」と訳されなければなりません。

現在完了形が使われていて、十字架につけられればなしのイエス・キリストというようになっていくということは、考えてみれば歴史的な事実経過とはまったく違います。実際にはイエスは十字架から下ろされ、そして埋葬されています。そして私たちの信仰によれば、三日目に甦らされた、とされているのですから。しかしそれにもかかわらずパウロは、歴史的な事実経過に

逆らう形で、イエスは今もなお十字架につけられたままの様態をしておられる、と解釈しているのです。

パウロにおける「十字架につけられた」というキリストに懸かる形容詞としての意味を持っている現在完了形の分詞 *estaurōmenos* が、上に述べたような意味合いを持っていることについては、上でふれました吉田忍氏の指摘（上注33）に逆らう形で、複数の欧文の註解書が言及しておりますが、日本語に訳されたパウロに関する著書の中では、ヴィクター・P・ファーニッシュ（Victor P. Furnish）の『パウロから見たイエス』<sup>35)</sup>が的確に次のように述べています。

＜パウロは、イエスの復活がイエスの死を取り消したとか、克服した、とは理解していない。パウロの目には、復活の主、イエスは依然として十字架につけられたメシアである。復活のイエスは、『受難日』以前のイエスではなく、十字架の上で死んだイエスである。従って、彼が復活に言及する際に用いる特別な動詞の時制が、しばしば十字架への言及の際にも用いられている（I コリント 1・23、2・2 とガラテヤ 3・1 において）。彼にとって、イエスは十字架につけられた者として存在し続けている。十字架が — たとえば空の墓でなく — パウロの福音の中心的な象徴であることは非常に顕著である＞（126頁）。

ここでファーニッシュが「特別な動詞の時制」と述べているのは、もちろん「現在完了形」のことを指しているのですが、奇妙なことに彼は、この文章の直前で復活について述べる際にも、同様の言い方しかせず、明確に「現在完了形」と言わないのはどうしてなのでしょう。

＜この章（注、I コリント15章のこと）でのパウロのおもな関心に対応して、彼は「復活する」という動詞の特別な形を用いている（4、12、13、16、

35) 徳田亮訳、新教出版社、1997年。

17、20節)。通常の過去形であれば、単に「昔々ある時に、キリストは死から復活させられました」を意味するだけであろう。しかし、パウロが用いている時制は「かつてキリストは死から復活させられ、今も復活した者として存在し続けている」ことを示している> (124頁)。

しかしファーニッシュは、私がすでにしばしば指摘してきました次のような重要なポイントについてはまったく言及しようとはしません。すなわち、第一コリント15章でパウロがイエスの「復活」に関してこの「特別な動詞の時制」すなわち「現在完了形」を用いているのは、パウロが3-5節において継承している信仰告白定型(ケーリュグマ)としての伝承の中で用いられている言い方、すなわち4節の「復活させられてしまっている」を受け継いでいるだけだということ、そしてそのような「復活」に関する用法は「キリストは復活させられた者として今もずっと生き続けている」ことを言い表わす至極自然な用法であること、しかしそれとは異なってパウロがまさに「十字架につけられた」ということに関して現在完了形を用いているということは、すでに述べましたように歴史的な事実経過に反する極めて異例な用法であること、しかも第一コリント15・3の伝承におけるイエスの「死」への言及は極めて自然な仕方で、やはりすでに言及しましたアオリスト形という過去形で言い表わされているにもかかわらず、その「死」と歴史的事実としては同一の出来事であったイエスが「十字架につけられた」出来事を、パウロ自身は「現在完了形」を用いて語っており、その対比によってパウロのその用法がいかにか人の意表を突く異例なものであるかが顕著なものとなっているということ、などです<sup>36)</sup>。その相違について考えることは、パウロの「十字架の神学」の核心について考えることを意味するのですが、ファーニッシュはそのことには気づいていないようです。

---

36) 拙論「弱いときにこそ——パウロの『十字架の神学』」、『聖書を読む・新約編』、岩波書店、2005年、77-102頁、とくに82-83頁、さらに拙著『「十字架の神学」の展開』(上注2)、197頁、注7をも参照。

さらに「イエスの死」についてですが、第二コリント4・10に、新共同訳でも口語訳でも、自分たちは「イエスの死を」この身にまどっている、という言い方が出てきます。しかしこの「イエスの死を」の「死」は、新約聖書の中で頻繁に使われている、上で述べましたような *thanatos* ではなくて、新約聖書の中では2回しか用いられることのない *nekrōsis* という単語でありまして、それは、パウアー (W. Bauer) のギリシア語辞典なども明らかにしていますように、「死」ではなくて「殺害」と訳されなければならないのではないかと私は考えております。しかし残念ながら、ここを「殺害」と訳している日本語訳は岩波訳しかありません<sup>37)</sup>。

しかし私は、ここでパウロが「殺害」という単語を用いているのには必然性がある、と考えています。それは、すぐ前の第二コリント4・6で、パウロはほぼ確実に自らの回心の出来事を反映する形で、神は「キリストの面(おもて)にある神の栄光を認識する光に向けて私たちの心を照らしてください」(岩波訳)と語り、さらに7節では、そういう意味における「宝」を「私たちは土の器の中にもっている」と語り、さらに8-9節では、具体的にその内容として、「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」と語るのですが、そのような文脈の中でこそパウロはこの「イエスの殺害を負う」ことに言及しているからです。つまりパウロのその、「キリストの面にある神の栄光を認識する」という回心の体験が、もしも、さきほどから私が言っていますような「十字架につけられ給ひしままなるキリスト」の面に表わされた神の栄光を見たという逆説的な体験であったのだとするならば、4・10でパウロが *nekrōsis* という、「殺害」すなわち「十字架刑によるイエスの殺害」を意味する単語に言及するということは、少しも不思議ではない、と思うからです。

イエスは殺されたのです。あの日、あのとき、あのようにして、イエスは「殺された」のであって、やすやすと私たちのために「死んでくださった」

---

37) 大貫隆『イエスの時』(上注17)、174、182頁は「殺害」という私の訳を支持してくれている。

のではないのです。「イエスは私たちのために死んでくださったのだ」というように「イエスの死」を解釈することを、最終的に私は否定するつもりはありません。イエスは死を賭してまで神の福音を語り、そしてそれを生きることを貫いてくださったのですから。しかしイエスご自身が、やすやすと「あなたがたのために死んであげますよ」と言って死なれたのではないということ深く認識しておくことは、極めて重要なことだと私は考えます。そして、ここではもはやくわしく言及することはできませんが、「律法による呪い」として「十字架」が理解されること（ガラテヤ3・13）や、もちろんさきに見ました福音書、とくにマルコ福音書の記述、などを参照すれば、イエスは殺されたのだということが深く展開されていることが明らかとなります。

そして、その十字架につけて殺されたイエスと同じように、私たちが共に十字架につけられてしまっているのだということを、パウロはガラテヤ2・19で、「キリスト・イエスと共に私たちは十字架につけられてしまっている」と、これまた現在完了形を用いながらなのですが、語っています。そのように、パウロによれば、キリストと共に私たちは今もなお十字架につけられてしまっているのです。ガラテヤ6・14の、「世界は私に対して、私も世界に対して、十字架につけられてしまっているのである」（岩波訳）という言い方においても、やはり現在完了形が使われているのですが、パウロは実にそういう言い方をすることによって、自分たちの苦難に満ちた歩みを、イエスと共に十字架につけられてしまっている歩みだというふう理解しているのです。イエスと共に十字架につけられて、殺されている、そういう歩みなのだ、とパウロは理解したのです。

そして、そういう形で十字架によって決定づけられてしまっている自分たち信徒、あるいは使徒としての実存の在り方を、パウロが彼自身の手紙の中で描写するとき、非常に注目すべきことだと私は思うのですが、歴史を生きた地上のイエスの言葉がそこに反映されてくるという事実があります。例えば、第二コリント6・1-10、とくに後半の8節途中からの、新共同訳から引用すれば次のような文章があります。「わたしたちは人を欺いているよう

でいて、誠実であり、人に知られていないようであり、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはおらず、悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで（最近の新共同訳はこっそりと「貧しいようで」と訂正していますが）、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。」

しかしこの文章は、「私たちは人を欺いているようであるけれども、しかし実際には誠実だ……」というような意味において訳出されてはならない、と私は強く考えています。そうではなくて、私たちは「人を欺いている者であって、同時に誠実であり、人に知られていない者であって、同時によく知られ、死にかかっている者であって、見よ、このように生きており（どうして「見よ！」というような強意の間投詞を新共同訳はすべて省略してしまうのか、ぜひとも翻訳者に聞きたいと思います。それは「ご覧なさい！」という強い意味を持った言い方だからです）、罰せられている者であって、同時に殺されてはおらず、悲しんでいる者であって、しかし常に喜んでおり、極度に貧しい者であって、しかし多くの人を富ませ、無一物の者であって、同時にすべてを持っている」というふうに訳されなくてはならない箇所だと思います。つまりそこでは、「逆説的な同一性（あるいは同時性）」が語られているのです<sup>38)</sup>。

そしてこのような言い方の中の、「悲しんでいる者であって、しかし常に喜んでいる」との文章の中には、明らかに「悲しんでいる者はさいわいだ」（マタイ5・3）という、イエスのあの「さいわいなるかな」の言葉の反映があり、「極度に貧しい者であって、しかし多くの人を富ませている」という文章の中には、同じく「貧しいあなたがたはさいわいである」（ルカ6・20）というイエスの言葉の反映が明らかに認められます<sup>39)</sup>。

38) 大貫隆『イエスの時』（上注17）、183-4頁は、ここを「……のようであり」と訳し、ギリシア語の *hōs* は「英語の *as if* にあたる」としてはいるが、しかし「同時に」という私の訳出は採用しているし、「目下の箇所では合計七回繰り返される用例の内のいくつかは（青野注、「人を惑わす者のようであり」以外はすべて）現にパウロの現実そのものであると考えなければならない」と正しく指摘している。

39) 大貫隆『イエスの時』（上注17）、184頁は、私に言及しつつそれに賛同してくれている。

もう一箇所、第一コリント4・8以下、特に11節以下の、「今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返しています。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています」(新共同訳)という、とても激しい言い方がなされている箇所ですが、ここでも、「侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返しています」という言葉の中には、イエスのあの、マタイによる福音書5章／ルカによる福音書6章の「山上の説教」／「平野の説教」で語られているイエスの「呪ってはならない、敵を愛しなさい」という言葉の反映がほぼ確実にあると言ってよいだろうと私には思われます。

そして実は、このような地上のイエスの言葉の明らかな反映がこうした箇所に見られるというのは当然のことなのでありまして、あのイエスの「十字架」はまさにイエスの逆説的な言葉や振る舞い、つまりイエスの言行、の不可避的な帰結であったのですから、つまりあの「十字架」は、かつてのパウロと同じ考え方をしているユダヤ教徒にとっては「神への冒瀆」としか考えられなかったイエスの逆説的な福音のゆえに惹き起こされたものであったのですから、そのイエスと「ともに十字架につけられてしまっている」信徒の生の描写の中においても、その「十字架」を必然的に、不可避的に招来したイエスの言葉と振る舞いの反映が、見い出されないはずはないのです。「十字架」によって決定づけられてしまっている信徒の生の描写の中に、その「十字架」を不可避的なものとしたイエスの言葉と振る舞いとが反映されてざるを得なかったというのは、こうして実は論理的な必然だったのです。

## まとめ

こうして、ときに地上のイエスの言葉と振る舞いに対してパウロはまったく無関心であったなどと言われることがあるのですが、そのようなことは決してなく、パウロは歴史のイエスの言行に深く思いを馳せていたにちがいな

い、と私は考えております。そしてパウロの神学も、とくにマルコ福音書のイエスの十字架の最期の描写に見られたような「十字架の逆説」を時間的には先取りする形で、「十字架の神学」として展開されているものだと思います。実はマルコという人はパウロの神学に深く影響を受けていた人ではないのか、と私は、佐藤研さんと共に考えておりますが、そのことにはもはやふれる余裕はありません<sup>40)</sup>。

日本経済新聞の2008年8月16日付けの文化欄は、カトリック教会が祝ったパウロの生誕2000年を記念して、論説「パウロの思想今こそ光る・弱さに宿る力危機生き抜く」(河野孝)を掲載していますが、そして新約聖書学関係では、佐藤研さん、大貫隆さん、そして私青野にそれは言及してくれているのですが、その最後の部分で、大貫隆さんに言及して、こう記しています。

＜パウロの現代的意味について大貫教授は、十字架上で非業の死を遂げたキリストを中心におくパウロの思想によって、死ぬに死ねない死を強いられた現代の人々にも神が救いの手を差し伸べてくれていると信じることはできないだろうかと問いかける。人間の弱さをみつめたパウロの思想は、現代人が人生を捉えなおす視点を提供してくれると言えよう。＞

イエスもまたこの「死ぬに死ねない死」を死んだのだとのとらえ方がこの背後にあるのは明らかですが、そのような死を強いられた現代の人たち、特に不条理ともいうべき死や苦難を与えられている人たち、その人たちの抱えている問題は、贖罪論からだけでは到底十分に説明することもできませんし、理解することもできませんし、いわんや解決することもできないでしょう。生まれつきの、あるいは生後の何らかの理由による重度の心身障がい者に向かって贖罪論を語ることに何の意味があるのか、ということ熟考してみれば、そのことは明らかとなるであります。

では、そのような重度の心身障がい、あるいは人間の責任ゆえではない難

---

40) 拙著『「十字架の神学」の展開』(上注2)、46-48頁、132-137頁を参照。

病、あるいは天災、日本で言えば地震、津波、台風、洪水、竜巻、その他その種の自然災害のゆえに、ほんとうに悲惨な仕方でも多くの人たちが亡くなっていかれるのですが、そのような出来事は、一体神との関係においてどのように理解したらよいのでありましょうか。

神戸栄光教会では伝統的に関西学院大学神学部出身の牧師先生方を招聘してこられたと伺っておりますが、関西学院大学の神学部長をされていたころの向井考史先生から次のような話をお聞きしたことがあります。『アレテア・聖書から説教へ』（日本キリスト教団出版局）という、主として牧師のための季刊誌があるのですが、比較的最近の一時期、日本キリスト教団からだけではなくて、聖公会やルター派、またバプテスト派などの種々の教派に属する者から成る編集委員会が形成されてこの雑誌を発行した時期がありました。私も西南学院大学神学部を代表するような形で、その編集委員を務めておりました。その編集委員会では、いつも次の号のテーマは何にするかという議論をしなくてはならなかったのですが、あるとき、向井先生がこうおっしゃったのです。先生のお宅は、1995年1月の阪神・淡路大震災で大きな損傷を受けたのですが、それのみならず、そのときの衝撃、そしてトラウマがいまなお残っている、つまり心的外傷後ストレス障害（PTSD=Post-traumatic Stress Disorder）で自分は今なお苦しんでいる、そして自分は旧約学を専攻する者としてヨブ記も研究してきたが、ヨブ記で語られているあの神義論では、この震災のような天災の問題をどう理解するかという問いを解決することはできない、だから、ぜひもう一度改めて、私たちはどのような神理解を持ったらよいのかという特集を組むべきだと思う、と、そう言われたのです。そのお話に一同衝撃を受けたのですが、まったくそのとおりだ、ぜひそうしよう、ということになりました。しかし、この雑誌の「巻頭言」は編集委員のうちの誰かが担当することになっていたのですが、このテーマはあまりに難しすぎて自分には書けない、と向井先生はおっしゃいました。難解であることは誰にとっても同じであり、皆自分に回ってくることを避けておりました。しかし私がたまたま『現代聖書講座』（同じく教団出版局）

の第3巻『聖書の思想と現代』の中の「苦難と救済」という章<sup>41)</sup>で天災の問題を扱っているということが出版局の方の言葉からわかってしまっていて、結局「青野先生が書きなさいよ」ということになり、書かざるをえなくなったのでした。

そこで私は、『『神』概念の変革』<sup>42)</sup>と題して「巻頭言」を書き、上述の『現代聖書講座』第3巻の中で展開した主張の内容を指示させていただきました。それは大略以下のような主張です。神は太初の昔から、「力は弱さの中でこそ十分に発揮される」というような意味での「逆説的な生命の法則」とでも呼ぶべき法則を置いてくださっている、ここに台風を起こし、かしこに洪水を、あるいは地震や津波を起こし、などというような仕方では歴史に介入されることはまったくなされない、あるいは人間の罪によってホロコーストにつぐホロコーストが行なわれても、それに介入することは決してなされない、実に惨めな惨憺たる状況が起こっていても、そこに介入することはなされない、いや、おできにならない、それほどに神は無力である、しかし神と共にある人間の生とは畢竟（ひっきょう）そのようなものなのであって、すべての者が苦難の究極としての死を迎えていく、しかしそれこそが人間の真の生命のあり方なのであって、そこにはそういう意味での生命の法則、つまり「逆説的な生命の法則」があるのであり、それこそが、太初の昔から貫徹されている、そしてそのことを見ていかない限り、つまり、「十字架の神学」的な捉え方が太初の昔から貫き通されているのだということを見ていかない限り、この大問題の解決は与えられない、贖罪論のような救済論だけでは、到底この難解な大問題を解決することはできない、という主張です。

最後にもう一度、福音書のとらえ方のまとめのところでふれた、マクグラス先生の文章の中の、神は「イエス・キリストの十字架の苦しみと恥辱と、屈辱と無力さと愚かさの中に」いることを選ばれたのだ、という主張の根拠

---

41) 1996年、234－254頁で、現在は前掲拙著『「十字架の神学」の展開』（上注2）、102－126頁、に収録してある。

42) 『アレタイア』第41号、2003年、2－3頁。

として、パウロの第一コリント 1・27-28が引用されていることに注目しましょう。

＜神が不在に思えたのは、私たちが予期したようなやり方で神が存在していなかったからです。『ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選びました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです』（Iコリント 1・27-28）。><sup>43)</sup>

パウロが言及しているこの「逆説的な生命の法則」こそが、神の在り様を終始一貫言い表わしているものであり、したがってイエスの十字架においても、否、そのみならず、この世界において生起するすべての出来事において、それが貫徹されているのです。

この第一コリント 1・27-28において明らかなように、神は「この世の無力な者」「この世の無に等しい者」を取って選ばれたのです。「負け組み」でよいのです。直接的な幸いを私たちが喜ぶことが禁じられているわけではありません。しかしそれは、それがいつまでも「直接的な幸い」として存続するものではありません。そしてそうあり続けなくなった時でも、それは「逆説的に」喜びの対象であり得ることを、よくよく知るようにと私たちは招かれているからです。そのような意味での「幸い」「喜び」を私たちは無条件に、上で述べましたリクールが言っていますように、「贈与」されているのです。「逆説的な生命の法則」を貫いているその「逆説」を踏まえながら、「贈与」された生命<sup>44)</sup>を、おごることなく、またいたずらに卑屈になる

43) マクグラス、『十字架の謎』（上注9）212頁。

44) 大貫隆『聖書の読み方』（上注2）も、最終的にこの「生命」を強調して適切に次のように言っている。『『永遠の命（ゾーエー）』とは現下の『自分の命（プシュケー）』を超越的な視点から受け取り直したものに他ならない。『永遠の命（ゾーエー）』は現下の衣食住の『命（プシュケー）』と別のものではない。それは、現下の命を自明視してそれだけにこだわることをやめて、神から贈与された超越的な命として受け取り直したものである。／すでにいま現にある命（プシュケー）

こともなく、淡々と<sup>45)</sup>イエスと共に、また人々と共に、生きていきたい、と切に願います。

どう読むか、聖書。キリスト教の福音は「贖罪論」一辺倒ではまったくなく、むしろ「十字架の逆説」としての福音にもっと私たちは目を注ぐべきでありましょう。聖書は、さらに多様で豊かな内容をもった「福音」を私たちに示してくれているからです。

---

を真の命（ゾーエー）として経験することは、遅れてやってくるのである。遅れてやってくるものは、すでに前もってそこになければならない。聖書の前での『新しい自己了解』とはこのような事態を指しているのだと私は思う」（152頁）。また大貫隆「生と死 — イエスの神の国」『死と再生・2009年上智大学神学部夏期神学講習会講演集』（宮本久雄・武田なほみ編著）、日本キリスト教団出版局、2010年、3—24頁中、10頁は、マルコ福音書9・43—47によれば、最初の二回は「命にあずかる」となっているのに、三回目は「神の国にはいる」となっていることに注目して、「このイエス自身による言い換えは重要です。『神の国』とは究極的には『命』のことなのです」と記している。

45) 拙論「弱いときにこそ — パウロの『十字架の神学』」（上注36）、89頁、拙著『「十字架につけられ給ひしままなるキリスト」』、コイノニア社、2004年、225頁、参照。